

川 崎 病 に 関 す る 研 究

分担研究者	東京女子医大第二病院小児科	草	川	三	治
研究協力者	自治医大公衆衛生	柳	川		洋
	日赤医療センター小児科	川	崎	富	作
	日本大学小児科	大	国	真	彦
	東京医科歯科大学小児科	矢	田	純	一
	国立公衆衛生院	杉	浦		昭
	東邦大学大橋病院病理部	直	江	史	郎
	昭和大学公衆衛生	今	田	義	夫
	聖マリアンナ医科大学小児科	山	田	兼	雄
	神奈川県衛生試験所細菌病理部	小	原		寧
	金沢医科大学小児科	浅	井	利	夫
	京都大学病理	濱	島	義	博
	京都大学小児科	三	河	春	樹
	久留米大学小児科	加	藤	裕	久

〔研究目的〕

本疾患の治療および管理指導を行なうためには、その発症原因、発症機序が解明されなければならない。疫学的に、微生物学的に、また病理学的にこれを解明し、その上にたつて、あるいはその解明ができない場合には臨床経験的にも、治療法や管理方法を検討する。またそれと共に長期予後に対しても調査検討を行うというのが本研究の目的である。

〔研究成果〕

今年度は疫学的には意義の深い年であった。昭和56年12月からそのきざしがあつた流行が、昭和57年に入り全国的に爆発的な発生となり、急拠第7回全国調査を行つたが、1月から6月までの半年で12,000名を超えた。昭和54年と対比しつつ、さらに細かく分析すればより多くの成果が得られるのではないかと期待している。また宮古島の調査も貴重なものであり、病因の追究にも役立つ事実であらう。同胞例の検討も重要な意味を持っている。

微生物学的には、本年はダニに関する調査と、ロタウイルスに主力を置き、患者の咽頭から分離されたポリダンス連鎖球菌についても検索を続けたが、ダニ分布の調査では、患者の家と対象に差がないことがわかつたのは1つの収穫であつた。ダニ内の微生物についてはまだまだ今後の研究が必要である。

病理学的には今まで検索が不十分であつた腎動脈、肋間動脈、消化管などで組織像が検討された。臨床症状の解明、管理に役立つ成果である。また村田、直江によるカンジダを用いた動物実験モデルでは、

腎動脈、睾丸動脈も検討され、病因としてはともかく、動物実験モデルとしては、極めて川崎病に類似した貴重なものであり、この研究はそれなりの価値のあるものであると考える。

免疫学的には免疫複合体の抗原又は抗体の同定が試みられたが、これはまだなんの成果も得られなかった。

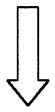
最後に臨床的な問題であるが、トロンボキサン B₂、エラスターゼ活性が測定され、動脈瘤の形成との関連が明らかにされた。今後臨床に応用されることであろう。また長期予後に対する検討も行なわれ、学童の心臓検診における川崎病罹患患児の成績も報告されたが、検診においてエコー法によって冠動脈病変の残存が発見されることから、断層心エコー法の検診への導入の必要性が強調された。さらに冠動脈瘤を残した者の中には、その後の追究で狭窄あるいは閉塞病変が発生することも判明し、冠動脈造影を繰り返して行なう必要性のあることが確認された。

治療におけるプロスペクティブな研究は極めて意義のあるものであるが、アスピリンを用いる方法が、第60病日の時点で冠動脈病変を残す率が最も少ないという成績が得られたが、統計的な差は得られず1つの傾向を示したに過ぎなかったが、今後もこれを継続し、もう少し長期的に検索する必要性のあることを確認すると共に、新しい方法も加えてこの研究を続けたいと考えている。

以上の成績を総合して、この研究班の主目的である治療、管理の基準を作成した。原因が不明であり、まだまだ今後改善される余地を残しているが、日本全般の医療水準を考えての基準として、まず妥当なものであると考えている。これを見ても、断層心エコー法の全国への普及が一層待たれるものである。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔研究目的〕

本疾患の治療および管理指導を行なうためには、その発症原因、発症機序が解明されなければならない。疫学的に、微生物学的に、また病理学的にこれを解明し、その上にたつて、あるいはその解明ができない場合には臨床経験的にも、治療法や管理方法を検討する。またそれと共に長期予後に対しても調査検討を行うというのが本研究の目的である。